

水軍とはなにか

服部, 英雄
九州大学大学院比較社会文化研究院 : 教授

<https://hdl.handle.net/2324/1517957>

出版情報 : 別冊歴史読本. 29 (32), pp.56-64, 2004-12-12. 新人物往来社
バージョン :
権利関係 : (C)新人物往来社 2004

私たちが想像する合戦の様相と実際とでは、かなり異なっていたのではないだろうか。『平家物語』をさまざまな角度から検証する。

水軍とはなにか

特別論考

服部 英雄 九州大学

◆鎧を着けて泳げるのか

鎧を着けたまま、泳げるのだろうか。古式泳法についてネットサーフィンしていたら、江田五月氏のホームページに到達した。江田氏は神伝流九段、日本水泳連盟の範士という。Eメールで質問したら、選挙直前にもかかわらず返事をいただくことができ、心底、恐縮した。主要なところを引用させてもらう。

「鎧を着て泳ぐ古式泳法はありません。私の神伝流ではありませんが、他の流派の泳ぎを見たことがあります。日本水泳連盟に、古式泳法部会(日本泳法委員会)があるので、聞かれると良いでしょう。私のところでも、手、足、そして手足を括って泳ぐ泳法はあります。捕虜になって、堀に飛び込んで逃げる時のものだとはいわれています」

さっそく同会委員長の山口和夫氏に照会してみた。現在継承されている甲冑遊かづちゆうは、小堀流踏水術たうすいと水府流すいふで前者は立ち泳ぎ、後者は横泳ぎ(あおり足)である。背の立たない水深で泳ぐのではなく、甲冑(約一五キログラム)を着用しても泳ぐことが可能であることを、御前で披露したものである。小堀流は熊本市本山・古閑こが

忠夫師範が継承しているという。

『日本水泳史資料集成』(日本水上競技聯盟、昭和十二年)をみると、「小堀流游泳術之伝」に「甲冑遊稽古之事」「甲冑着用船岸ヨリ落候時心得の事」「甲冑にて浮沓無しに海川を渡る時の事」が記述されている。「甲冑遊稽古之事」ではたしかに「初心の時水深の所にて試るべからず、危し身丈ケ位の所にて士たる者、修行致し置くべきこと也、重きもの故に、浮沓無しには自由になりかたし、浮沓の用意兼て致しおくべきこと也」とある。

鎧を着たまま海、あるいは川を渡る場合、浮き沓・浮き沓板を使用した。ライフジャケットである。特別な用意が必要だった。ふつうに徒渡つたのでは、危険な要素が多すぎた。鎧と水は相反するもので、身を守るべき道具が、命を危険にさらすものになった。泳法書に書かれたものは、万一鎧のまま水中で転倒、あるいは落下してもパニックに陥らず、安全に浅瀬まで移動するための泳法ではないかと思われる。水練としてはよほどに特殊なものであろう。ルーツは実用兵法(戦争技術)にあったが、神伝流でも小堀流でも特異な泳法を伝えて宣伝材料にした。筆者も青年時代には沢登りを趣味にし



甲冑をつけて泳ぐ
小堀流の御前游
小堀流踏水会提供。

『平家物語』の虚実

鎧を着して水に入ることの危険性を認識したうえで、以下に実際の合戦を考えた。軍記物の多くは語り物だった。聴衆の反応を見て次第に語りが変わることもあったのではないか。軍記・絵画からわれわれが想像する戦いと、実際はずいぶんちがっていた。

『平等院前・先陣争い』『平家物語』によれば、宇治川の先陣争いは平等院前の急流を乗馬によって徒渉したというが、ずいぶん危険であった。「寿永三年正月二十日余」とある。二十日はグレゴリウス暦（現行西暦）一一八四年三月十二日に該当する。『平家物語』は比良・志賀の雪どけ水で増水していたとする。馬に乗る侍に

は必ず二人の従者がつく。馬に頼ることのできる騎馬武者ならまだしも、従者の鎧武者が逆巻く川面を安全に渡ることはできなかつたであろう。場面からいっても一騎・二騎だけが単独で渡って大音声をあげたりしたら、待ちかまえる敵の集中攻撃を受ける。平等院の岸辺で宇治の急流を見たときから、何かが違うはず、と思っている。

もう少し下流に行けば、おだやかな流れになって、浅瀬もある。天ヶ瀬ダムができる前には宇治橋近辺に徒歩で渡ることもできる場所が一カ所あったという。徒渉地点は周知されており、裏を掻くことが必要だったことはわかるが、宇治といえは平等院だから、聴衆のウケをねらう『平家物語』の語り手が適宜結びつけていったような気もする。

生け捕りの平宗盛・清宗 壇ノ浦合戦に敗れた平宗盛・清宗親子は、泳ぎ（水練）が達者で、囚われの身となり、生き恥をかけたという。鎧を脱いだのだからか。平家滅亡を目撃した内大臣が禪（ぜん）一つで泳いで逃げたわけだが、なじまないものがある。船の上で捕獲されたというのがふつうである。

ひき島・おい津 壇ノ浦合戦前夜、平家

は「ひく島(彦島)」、源氏は「おい津」(満珠島)に布陣したというが、満珠島は無人島で、周囲は多くが岩壁である。物資の補給は不可能である。「引く」、「追う」からの語呂合わせで、登場したにすぎない。

一部隊が臨時に停泊・駐屯したことはあっても、本隊は都市(長府、のちの串崎城周辺)に拠点を置いたと考えるべきである。平家方も前進基地を彦島においたことは確かとしても、八島(屋島)ほどの広大な山があるわけではない。後述する山鹿秀遠がいたから、その地盤である筑前国遠賀郡・洞海湾に本営があったのではないか。小さな島では襲撃の危険もあった。波間に浮かぶ平家という印象を強調したから、彦島がズームアップされたけれども、事実は少し異なるろう。

数の誇張その1・弓の射程距離 『平家物語』で武士の弓の強さが的との距離で記される。八島での那須与一が七段二段は六間・七段は八〇メートル(弱)の距離で的中、壇ノ浦合戦で、和田義盛・その矢を射返した仁井親清・それを射殺した浅利与一が三町・三町余り・四町とあるけれども、現代競技での弓の遠矢遠的(が、六〇メートル先(すなわち三十三間・半町強)に的があること、さらに計測など不可能

な海上だったことからすると、数字はにわかには信じがたい。

数の誇張その2・八艘跳 壇ノ浦合戦で、鎧を着た源義経が八艘跳をする絵をよく見る。ほんとうに鎧・兜のまま飛べるのだろうか。むろん『平家物語』のものには八艘跳とはなく、二丈ばかり「のいた」(離れた)味方の船に飛び移ったが、追う「能登殿」(能登守教経)にはそれができなかったとある。二丈は二〇尺だから六メートル。走り幅跳びの日本男子記録は森永選手の八メートル二五センチというから、義経なら不可能ではないといわれそうだが、鎧・着衣の有無、水中落下の恐怖感、助走・着地の違いを勘案すれば、飛べてもせいぜい一丈か。

これらは数字の問題だから、単なる誇張といえよそれまでだが、後述するように情景の誇張、時間などの変更もまたしばしば行われている。

能登守教経 『平家物語』の虚構性を議論する際の素材とされてきたものが、「能登守教経」の死んだ場所である。かれは『吾妻鏡』寿永三年(元暦元年一一八四)二月七日また十五日条いずれによっても、一ノ谷で安田義定に討ち取られている。『玉葉』でも二月十九日条に「被渡之首

中、於教経者一定現存云々」とある。

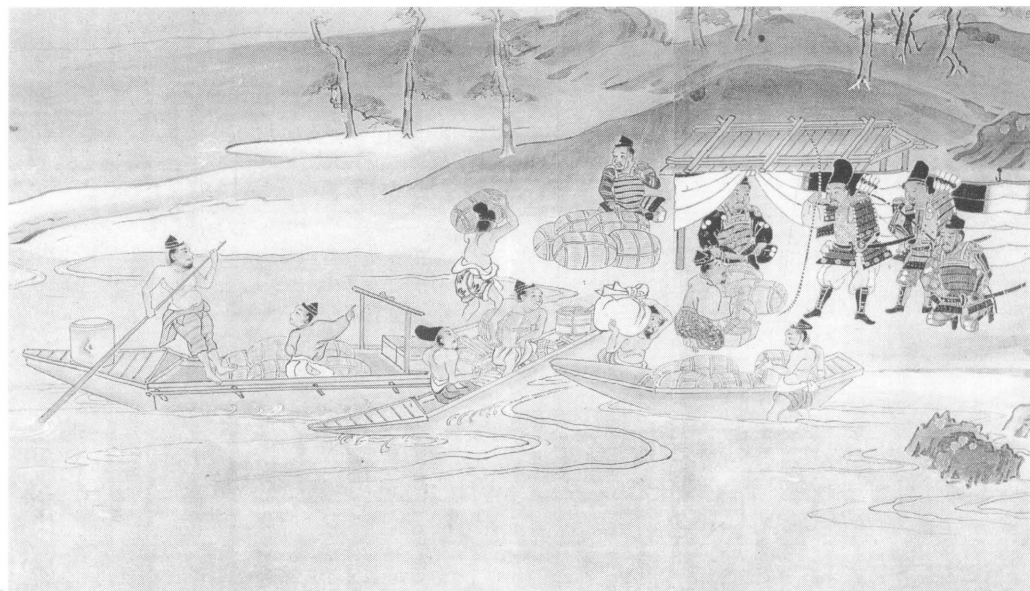
この現存を教経の生存と解釈する研究者がいる。『日本国語大辞典』に「一定」は「確実であるさま」「確かに」とあり、「現存」は「現実に存在すること」、「この世に生きていること」として当該の「玉葉」記事を引用する。両様に解釈できることにもなるが、渡された首の中に「現存」しているわけだから、教経首級は含まれていたのである。

京都に運ばれた十ほどの平氏首級の中に、教経の首も確認された。教経のことだけわざわざ記されたのは、その生死が話題になっていたからにほかならない。もし一ノ谷で教経が死んでいたのなら、八島以降に登場する教経は架空の人物で、佐藤継信がかれに射殺された話も、八艘跳の原語も、創作であって史実ではない。「能登殿最後」なる巻自体、虚構となる。

ところが『醍醐雑事記』に壇ノ浦で討ち死にした人物が列挙されており、その中に「自害」として教盛、知盛にならび「能登守教経」がみえる。『平家物語』の記述を裏付け、『吾妻鏡』『玉葉』の記述を否定する。

実在の人物・教経が果たしてどこで戦死したのかは後世のわれわれにはわから

「紙本著色楽音寺縁起」 陸の武士は鎧、船を操作する人は裸に近い。楽音寺所蔵



ない。平家も源氏も教経の生死に閑して情報戦、宣伝戦を行った。ともに「討ち取った」、「いや現にここに生きているではないか」と宣伝したのである。それらを受けてそれぞれの記録ができていった。むろん文学の世界では、平家きつての剛弓の主は、最後まで戦って、平家とともに滅びなければ、文学として完成しなかった。

軍記物には作り話も混じっているし、史実を伝えていても、後世の人間が誤認してしまうことも、また多い。『平家物語』がなぜあれほどにおもしろく、心地よい響きを持つのか。琵琶法師は多くの客を集め、喜捨を得なければ生活できない。随所に聴衆を引き付けるための脚色・誇張があり、その結果、誇るべき日本古典文学の名作ドラマが誕生した。そのことを忘れてはならないが、いっぽうでは共感を得るだけの真実性もあった。みなが真実と思いきむだけの背景・迫力があつた。歴史学に携わるものはそこから虚と実を読み分け、史実を読みとっていく努力を要求される。

勝浦上陸その1 水上での武装 元暦二年(一一八五、文治元年になる)、撰津渡辺に集結した東国武士は「船軍の様は未だ

調練せず」として評定を行っている。壇ノ浦合戦直前、平家方の上総悪七兵衛は、「坂東武者は馬の上にてこそ、口はきくとも、船戦はいつ調練し候ふべき」と嘲笑している。『平家物語』八嶋軍に能登殿は、「舟軍は様あるものぞ(それなりのやり方がある)とて、鎧直垂をば着給はず。唐巻染の小袖に唐綾緞の鎧着て——」

といったという。教経本人の言葉だったのかどうかは別としよう。少なくとも聴衆はこの言葉に共鳴できた。真実を含む言葉であった。海戦では陸戦とは異なる武装をしたことは確かと思われる。鎧直垂には四つの括りがあるから、着脱に不便だったものか。陸戦用の大鎧は馬上にあることを前提とする。余裕のある侍であれば、おそらく水上用に替えただろう。「楽音寺縁起」をみると、陸上の武士は甲冑をまとっているが、海上で舟を操る人間は禪ひとつ、ほとんど裸である。水軍の多くは、こうした格好をした戦闘員だったとみることもできる。

「蒙古襲来絵詞」で竹崎季長をはじめとする鎮西武士はみな大鎧を着て、敵船に乗り込んでいく。また漕手(水主)は胴丸風の鎧をつけるものと、まったく着装しないものと両方がいる。水主も攻撃され

標的となるが多かった。

朝鮮役での海戦に島津義弘、毛利高政など敵との合戦中に海中に落ちた武将が多いが、いずれも助かっている(島津義弘露梁ノ戦功『征韓録』、『日本戦史』所収ほか)。小堀流の水練の達人で、大きな浮き沓をつけていたのかもしれないが、筆者はやはり、そのとき鎧は着ていなかったからだと考える。いかがだろうか。

勝浦上陸その2 千満時間 寿永三年(元暦元年)八島に向かった源義経は二月十六日丑の刻(すなわち深夜一時から三時の間)に淀川河口の渡辺を出発、順風に乗って明くる卯の刻(朝五時から七時にかけて)、阿波勝浦に到着した。このことは『平家物語』以外に『吾妻鏡』にも記述がある。『平家物語』には「三日に渡る処をただ三時ばかりに渡りけり」とある。海路一二〇キロをわずか六時間(丑、寅、卯の三時)で渡ったから、時速二〇キロである。旧暦二月十六日、月齢は一五、大阪湾の満潮から干潮の吉野川河口にいたるまで、六時間は紀伊水道の引き潮に乗り続けることができるというストーリーである。この年の二月十六日はグレゴリウス暦(現行西暦)四月六日である。ここで問題なのは、春の大潮では干潮はかな

らず午前・午後の一時ごろ、満潮が朝夕の七時ごろになることである。丑の刻の出発では南から満ちてくる潮に向かうことになるので、逆であって、進むことはできない。満潮で淀川河口が最高水位にあつた朝か夕のいずれかに出発したとみなくてはならない。けっして真夜中ではありえない。

『吾妻鏡』同年三月八日条では、「源廷尉義経飛脚自西国参着、申云去月十七日僅率百五十騎、凌暴風、自渡部解纜。翌日卯尅、着于阿波国、則遂合戦」とある。解纜時刻は不明ながら、やはり卯尅到着になつているが、これらは理解に苦しむ。当時夜間の航行はできる限り避けたのではないか。夜間は待機していて、早朝卯の刻に合戦したというのならばわかる。日にちは一日分ずれており、『史料総覧』は「翌」日十八日阿波到着とする。しかし『玉葉』元暦二年(一一八四)三月四日条には小槻隆職が注進した義経申状の引用があり、「去月十六日解纜、十七日阿波国着、十八日八島に寄す」と明記されている。『平家物語』も『吾妻鏡』も一日のずれと騎数のいくぶんかの差を除けば、似た話である。いずれか、例えば『吾妻鏡』が『平家物語』に依拠した記述をし

たものか。

『吾妻鏡』は「暴風を凌ぎ」とし、『平家物語』は順風ながらも「大風大波」とし、これらを受けた『史料総覧』も「夜、風雨に乗じ」と記している。『玉葉』によれば、京都の天気は十六日天晴、十七日微雨、十八日天晴で、とくにはげしい嵐や雨の気配はない。すでに冬型の気圧配置は緩みかけてはいたが、強すぎる北風を水手梶取は恐れた。義経はなかば武力で威嚇して船出させている。その強風は義経に味方した。千満の潮位差は一・五メートル弱でそれほどにはなかった。櫓權を操る水主の力漕もあつて、潮の変わり目までの到着も不可能ではなかった。船出と到着の時間だけが不自然である。

『平家物語』は真夜中の出帆、夜明け前の戦場到着という情景設定によるドラマ性を優先させたと思われぬ。しかし潮と風を利用して、最速で四国に到達したことは事実であろう。夜間も多少はムリをして航海したのであろう。

関が原前夜の慶長五年(一六〇〇)七月十五日、軍団を率いて広島を船で出発した毛利輝元は、十九日に大坂に到着している。三六〇キロを僅か四日であり、驚くほどの速さだが、出発したのはやはり



「蒙古襲来絵詞」 水主、梶取は鎧を着ないか、着ても軽装だった。宮内庁三の丸尚蔵館所蔵。

大潮の日十五日だった(吉川家中并寺社文書)」。光成準治「関ヶ原前夜における権力闘争——毛利輝元の行動と思惑」平成一六年度史学会報告・資料)。

馬の足立 義経の第一隊は五艘で兵糧米、物具(兵具武具)を積み、馬は五十余匹を積んだというから、一艘には一〇匹の馬が載せられていた。吉野川河口が遠浅であることも、義経は知悉していた。小舟を下ろし、兵はそれに乗せ、馬は本船を

傾けて、海に落として、手綱で小舟に引きつけつつ、泳がせた。馬の足立が鞍づめ(馬の前輪・後輪・背後の鞍骨の間、鞍笠)が浸るほどの深さ、つまりぎりぎりでの馬の足が立つ深さになって、引き潮で浅瀬となった干潟の沖を騎乗していった。もつとも水島合戦でもよく似た表現がなされている。義経の知識というよりは、兵士および水手梶取らの常識であった。

壇ノ浦 壇ノ浦合戦は三月二十四日(グレゴリウス暦・現行西暦五月十三日)である。旧暦二十四日は当然に小潮であった。旧暦三月二十四日は二〇〇四年の場合なら、五月十二日に相当し、その年と一日しか違わない。この日の潮位表(気象庁ホームページ)をあてはめれば午前四時半、午後三時半過ぎが満潮、午前一〇時が干潮となる。関門海峡は余りに狭小なため、満潮時に周防灘側が高くなって西流、つまり日本海(響灘)側への流れになる。干潮には東流になる。

この合戦については黒板勝美『義経伝』(日本文化名著選、昭和十四年、創元社)に詳しいシミュレーションがある。六〇年前の叙述であるが、力作である。ただし上記潮位の推定は午前五時半に高潮とする黒板シミュレーションとは朝で四〇分ほ

ど、午後ほもつと大きな時間差(黒板五時半、気象庁三時半)がある。この時間差を組み入れて、黒板復原案に若干の修正を加えたい。

合戦の開始については『平家物語』に三月二十四日卯刻に矢合せとあるけれど、『玉葉』元暦二年四月四日条に引用された義経進状によって、午刻に合戦が行われたこと、「自午正、至哺時」、すなわち正午から申の刻、夕方四時頃まで行われたことは、黒板先生指摘のとおりで、動く余地はないだろう。ここでも再度『平家物語』の時間に関する虚構性を指摘できる。『平家物語』は一般常識に従いつつ、聴衆の耳にもつとも自然に受容される早朝の海戦開始としたが、特殊な地形と自然現象に差配されるこの海では、そうした常識とは異なっていた。

開戦時正午は東流の終わりにかけてであった。最速で時速八哩(およそ一六キロメートル)もあった潮の流れは、四分の一の二哩(およそ四キロメートル)にまで減じていた。二時間後、未の刻にはほぼ静水となるが、以後急な西流が始まった。午の刻にいずれかが対岸への移動を開始し、合戦となった。西から東に向かう平氏には、当初の潮流は有利であったが、静水

時には多勢に押しされ劣勢となり、西流に転じた潮汐について逆転はかなわなかった。そうした戦況を読み取ることができただけ、あとはひたすら流される中で戦いだった。

激しい潮の流れには船のコントロールもままならなかった。干満差が最小となる小潮の日(二十四日)が選ばれたのは、そうした理由からであり、そうでなければ海戦は不可能だった。合戦は潮の流れが止まる時間帯を狙って正午から開始された。

◆海戦の実態

合戦は船の争奪の形で行われたと思われる。まず操舵技術がものをいったであろうが、最終的には操舵技術以上に船の数(た)がものをいった。数に勝る源氏が勝利を収めることは時間の問題であった。

中世の海戦を描いた絵巻はさきさきにみた「蒙古襲来絵詞」「楽音寺縁起」などがあるが、全体に数は少ない。文禄慶長の役の最終局面、露梁海峡における李舜臣(イ・スンシ)將軍率いる水軍と、小西行长水軍の攻防が描かれる『征倭紀功図巻』は貴重で、これによれば、戦いは船の争奪、沈めあ

いであった。史料上も「石火矢にて其舟を打破り」大明の舟よりは大石火壺を投げ入れ、日本の兵船を打ち破り焼き沈め」「番船を切捕る」「敵船より熊手投鎌を打ち懸ける」(前掲島津義弘露梁ノ戦功、『征韓録』、あるいは「舟を取り、其ま、火を掛け参候、二艘まで番舟取り候」、「番船の真先なる一艘に乗り移り、唐人を撫切にし、又舟の苦に火を付け数々の船へ火を投げ込む」とある(藤堂高虎巨濟洋ノ戦功、藤堂家覚書、藤堂家譜、前掲書所収)。

なお先に勝浦合戦でみたような、海中に馬を進めての矢戦もあった。これも海戦の一種であろう。『平家物語』に「馬の足立たず」という表現が多く、水島合戦にも「馬の足立ち、鞍爪ひたる程にもなりしかば」とある。先にみたように、舟から陸に上がるとき、馬の足が立つかどうか(た)が問題だった。児島藤戸の合戦に佐々木盛綱(もりつな)は海中の浅瀬を発見して騎乗で進軍したが、騎馬による海戦である。「馬の足立ち」にかかわる表現は『蒙古襲来絵詞』にもあつて「赤坂は馬の足立ち悪く」とある。博多警固所の置かれていた赤坂山(今の福岡城、古代の鴻臚館(こうらか)所在地)の西には大きな干潟が広がっていて、今その名残が大濠公園の池になつて

いる。潮汐の進入があつた。部分的に深みもあつたが、竹崎季長ら鎮西武士は筑前御家人より地形と潮流にかかわる知識を入手して、馬の足が立つ場所を選びつつ、進撃しようだ。こうした知識は蒙古側には稀薄(きぼく)だったと思われる。

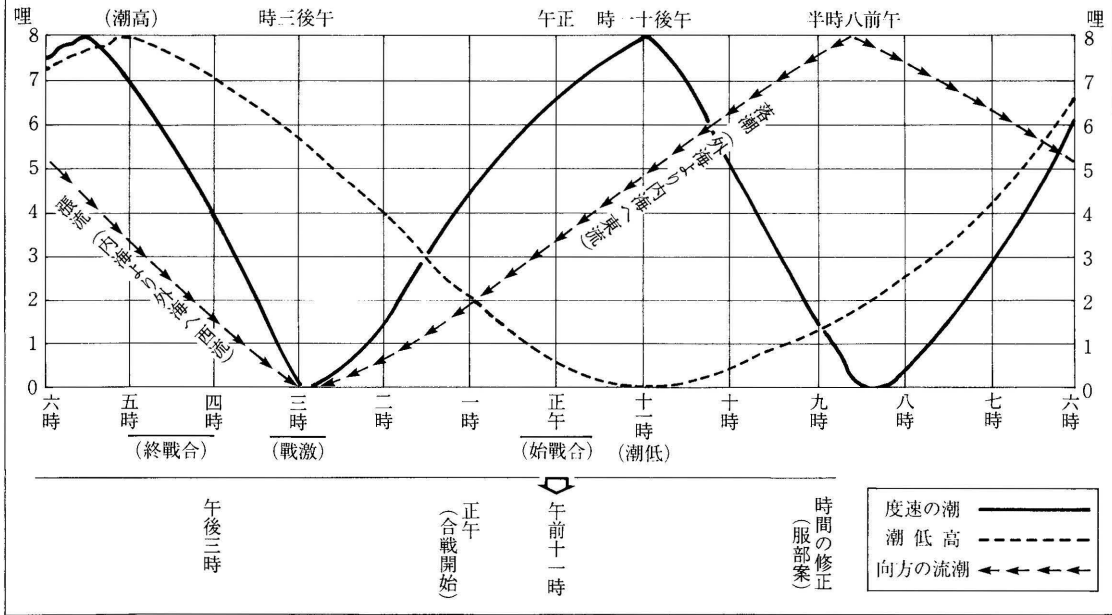
◆唐船を率いた平家水軍・山鹿秀遠とその末裔

豊前・筑前を流れる遠賀川(おんが)その流域に力を持った武士が、山鹿秀遠である。『平家物語』壇ノ浦合戦に山賀(山鹿)兵藤次秀遠は「九国一の強弓精兵」であり、五百余艘で先陣に漕ぎ向かったとある。ほか松浦党三百余艘が二陣、平家公達二百余艘が三陣を構成した。松浦党が三百余艘、源氏方の熊野水軍が二百余艘、河野水軍が百五十艘だったから、いづれをも、はるかにしのぐ。

「平家の船は千余艘、唐船少々相交れり」ともあるから、中国人船頭(綱首)の船も交じっていた。山鹿秀遠は日宋貿易に携わる人にも、軍事的な指揮権を有していたのであろう。平家は「よき武者」を兵船に、「雑人ばら」を唐船に乗せるという偽装(偽装)工作を試みたが、阿波民部重能の裏切りによって、失敗に終わったとある。「九州随一の水軍」たる秀遠は、唐船も

壇の浦潮流流速度圖

文治元年三月二十四日



潮汐表 黑板勝美氏作成図を気象庁ホームページ、潮汐表で修正。

統率し、實質は日本一の大船団を率いていた。

山鹿(山賀)兵藤次秀遠は粥田前武者所藤原経遠の子で、山鹿庄の兵藤恒正(政)の一族末裔である(菊池系図『続群書類従』)。経遠は『宇佐大鏡』、『続左丞抄』に、経政は『宇治拾遺物語』などに登場する。中央にも名の聞こえた武士団であった。兵藤氏(粥田・山鹿氏)は鞍手郡(粥田)をはじめ遠賀郡(山鹿・葦屋)、嘉麻郡、穂波郡に大きな力を有する筑前東半、最大の領主で、遠賀川流域と洞海湾を支配領域とした。

平家軍事力の主力を担った兵藤氏、粥田・山鹿一族はあえなく滅亡したかのように見える。粥田・山鹿一族がもっていた所職・利権は、そのまま勝者となった源頼朝のものになり、やがて北条氏の所領になって、麻生氏が地頭代となった(『麻生文書』)。しかし五百余艘もの軍船を率いることができた水軍の将、兵藤山鹿・粥田一族は、まったく歴史から消え去ったのだろうか。つづく時代に何の痕跡も残せなかったのだろうか。

文保元年(一一三一)の関東下知状に「豊前市津平次郎跡」が「菊池三郎次郎入道浄宗跡」に宛て行われている。市津

は遠賀川本流と分かれて、彦山川をわずかに上った位置にある。菊池兵藤一族は依然として遠賀川流域に息づいていた。

南北朝時代、文和三年(一三五四)以降、武恒犬丸(若宮庄)に対して、武藤肥前守・開田佐渡次郎による濫妨が続いていた(『南北朝遺文』・九州編三六九六、六三四一、六三四二)。開田佐渡次郎遠員およびその一族開田出羽守遠長に関しては何点かの史料があり、かれらが相伝と主張し、また足利尊氏から安堵も得た所領群がわかる(『南北朝遺文』・九州編二四八、二二七一、二二〇九、三〇九五、三二二〇)。

それを整理すると、肥前国高来東郷のうち、有家村・有馬村・加津佐村半分・三会村、肥前国神崎庄、加世庄、日向国吉田村、筑前国底井野郷・頓野村となる。高来東郷は有明海(島原湾)沿岸で、島原半島南東海岸部である。嘉瀬川河口の加世庄(嘉瀬庄)は肥前国府津であるし、筑後川河口の神崎庄は大宰府地区の有明海側外港のような港津である。筑前遠賀郡底井野は遠賀郡、いまの中間市である。先にもみた頓野郷は鞍手郡、いまの直方市である。遠賀川の左岸・右岸にあたる。

注目すべきことはいずれにも有明海・

島原湾の重要港津が含まれていることだ。高来東郷の有馬はのちの原城所在地である。大江の浜という良港があった。有明海（島原湾）の口である口之津も近いし、あるいは含まれていたかもしれない。有明家はその北で、のちにキリシタン宣教師によって、セミナリオが開校された。加津佐はコレジオ、セミナリオがあった。いづれもアジア・中国への窓口といえる。三会村は近世には藩倉があり、島原の乱には襲われている。やはり港があった。

また佐賀平野の嘉瀬、神崎両庄ともに明書にも記される良港、嘉瀬津、蒲田津（『図書編』など明書には隣接する蓮池のほうに記されている）の所在地で、嘉瀬川、筑後川という大河の河口津だった。嘉瀬津は鑑真が到着したという伝説を持ち、『平家物語』に鬼界が島に流される平康頼・俊寛らが出航した港として記される。神崎庄は長承二年（一一三三）に宋船が来着したことでも知られている（『長秋記』）。これらの港は九州管内の内海交通、外海交通、さらには日本・中国貿易の拠点であった。

開田氏への恩賞配分は、明らかにこうした港津の支配とそれによる利益を得よ

うとしたものであろう。とくに有馬・有家のような海外貿易港として知られる地域の支配は、対アジア交易とその利益を念頭においたものと推測させる。

そして開田一族は、こうした有明海の多数の港と同時に、筑前遠賀郡底井野と鞍手郡・頓野の地頭職も得ていた。開田氏は遠賀川流域では頓野に拠点をおく一方、勢力の拡張も図っている。またように若宮庄にも濫妨（乱暴）をくりかえしていたのである。頓野と若宮は距離にして八キロほどである。預所と称したというから、何がしかの所職があつて、越境したのだろう。開田一族は内海流通、また海外貿易への志向を大きく持つと同時に、遠賀川流域にもいくつかの拠点を持っていた。

開田はカイトで粥田に音が通じる。かれらが拠点とし、また行動範囲であつた頓野、そして若宮はまさしく粥田庄に至近の隣接域で、歴史的にはその一部であつたことさえ考えられるような地理的位置にある。開田一族は資長、遠長、遠員を名乗っていた。「長」を通字（世襲される名前の一字）としてもいるが、また明らかに「遠」の字も通字としている。山鹿秀

遠、粥田経遠みな「遠」を通字としていたではないか。

残念ながら開田一族の系譜は明らかにできない。しかし兵藤一族の後裔であつたか、兵藤一族を強く意識したことはまちがいないだろう。鎌倉時代を通じて、姿を消し、あるいはひそやかに暮らしていたかのような水軍の将、兵藤・開田氏はこうして南北朝に華々しく再登場した。みたごとく『平家物語』は山鹿秀遠の率いた五〇〇艘のうちに、唐船があつたと記している。水軍山鹿氏は日宋貿易にも従事し関与したが、そうした技術は北条氏政権下でも、彼らの延命を可能にし、南北朝に開花した。兵藤氏にもさまざまな庶流があつて、生き延びた一族が、遠賀川水運、玄界灘・瀬戸内海水運を支える下部の機構、水手・梶取を掌握していたと考えたい。